

あとがき

もともと二人の、各々の研究分野における必要性からはじめた仕事であった。活字本の『僧綱補任』（興福寺本）が容易に利用できさえすればそれでよいという心算であった。いざ編成しなおした段階で、誤植らしきもの、落丁らしき箇所などが目につき、かつて調べた諸本などを対照してゆくうちに、現在の形となつてしまつた。したがつて、記述の正不正にかかわらず興福寺本が中心で、他はすべて従という形をとっている。補入したほとんどのものは年次的に興福寺本とふれあうので問題はなかったが、やや年次的にはなれる寿永二年から元暦三年までの三年間の残欠本の扱いについてはかなり躊躇した。ただ、わずか三年といつても、この期の僧綱の員数は多数であり、個々の記述は少なく、多少問題があつても、何かの役に立つこともあろうし、若干のものは本体と接続することもあり、あえて加えることとした。なお『三会定一記』・『維摩講師研学堅義次第』ほかまだまだ加えるべきものも少なくないが、二人がさける時間などの限度もあつて見送ることとした。

当然のことながら、『僧綱補任』の記文の提示であつて、各僧の正しい伝とは限らない。はじめにもふれたように、本書をもとに、必要に応じて各僧個々の調査を行うためのものである。お氣付の点を、われわれに御指摘いただければ幸いこの上もない。解題を平林が担当した以外は、二人の共同作業である。最後になつてしまつたが、本書の公刊の機会を作つてくださった、われわれの上司でもある宮内庁書陵部図書調査官橋本美男氏、および企画のなかにまげて取り上げていただき、面倒な組版に数々の助言をいただいた笠間書院社長池田猛雄氏に心から感謝する次第である。

昭和五十一年四月二十九日

編者